

放課後や休み時間を活用した自然観察・体験活動の充実

－ 「見触笑でGO！」の実践 －



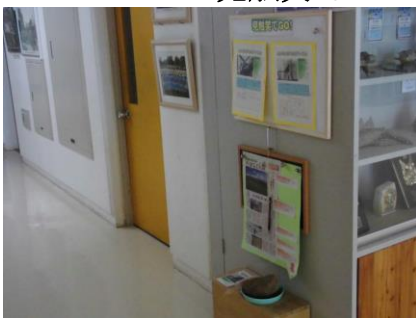
実施担当者 美瑛町立美沢小学校
教諭 片倉 彬貴
校長 布施 司

1 はじめに

本校は、十勝岳のやまなみを間近に仰ぐ、広大な畑作地域に位置している。また、校区内に「青い池」「白金温泉」をはじめとする観光名所がある風光明媚な場所でもある。校地は見本林や池もあり、5畝の広さがある。また、下校はスクールバスを活用するため、放課後の活動時間が十分にある。そこで、日常的に自然に対する意識を高めたり、この環境を理科や生活科の学習に活用したりするために、「見触笑でGO！」を企画した。これは、校地内の自然に対してのクイズや体験ミッションに取り組むことで、カードを集める活動である。その活動を通して、自然に対する興味関心を高めたり、自然に対して知識や観察視点を増やしたりすることを目的としている。活動場所を校地内、活動時間を休み時間や下校バスまでの放課後とすることで、活動の自由と安全についても配慮した。また、画像データやカードの形で記録が残り、授業への活用も可能である。

2 ねらいと活動の様子

2-1 「見触笑でGO！」のねらいと準備



(1) 「見触笑でGO！」のねらいと基本

「見触笑でGO！」は身の回りの自然に子どもたちが目を向けさせることをねらいとしている。活動を大きく3つに分けた。

「見」→自然を観察したり、写真にとったりする

生き物探し、写真撮影 等

「触」→自然をいかした体験をして、それを記録する

軽石探し、ドングリトトロ作り 等

「笑」→体験や知識を増やしたり、学習と関連付けたりし、興味・関心を高める

ポイントをためる 学習活動・自由研究へ 等

(2) 「見触笑でGO！」の準備

子どもが自由に使えるデジタルカメラやミッションを出題するコーナー、一人一人の記録を残すカードとファイルを用意した。特にカメラは学年単位の活動であれば一人一台あたり、ホワイトボードに名前を書くことで自由に持ち出せることとした。最終的には「SDカード」を全員分用意し、一人一人のデータを管理した。



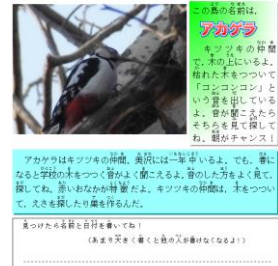
2-2 「見触笑でGO！」の活動

(1) スタートは「クイズ」ミッション、そして写真ミッションへ

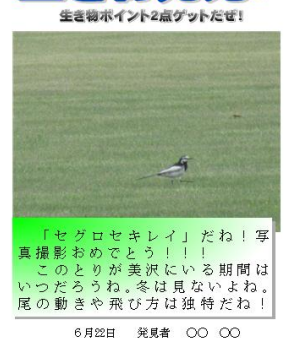


まず、だれもが取り組めるように「クイズ」からスタートした。「桜の開花日」等みんなで予想して楽しく取り組んだ。次に「鳥を見つけよう」という活動を行いアカゲラ等を見つけるとカードを発行した。カードを集める楽しさと共に、身の回りにはいろいろな鳥がいることに子どもたちは気づき始めた。また、低学年を中心にカード集めに興味を示し、休み時間や放課後、カメラをもってグラウンドを歩き始めた。やがて、写真ミッションは、「セミの抜け殻」「ムクドリ（渡り鳥）」「野ウサギ」等へと広がりを見せた。子どもの撮影に担当者が追いつかず、生き物を最初に発見するのは子どもとなってきた。また、野ウサギがグラウンドにいることには、全校みんなが驚いた。動物だけでなく「夏の花を探そう」等植物のミッションも設定した。動物については男子の興味が高かったが、植物の設定により、女子の参加も高まった。写真を撮影した子どもには、その写真を入れたカード（2ポイントゲットだぜ！と記載されている）を渡し、一人一人のファイルに保管するようにした。

こんなとりをさがしてね!



生き物発見!



(2) 「体験」ミッションを開始



体験的な活動の最初は「軽そうな軽石」探しから始まった。これは、十勝岳噴火から30年が経ち、新聞で特集されていたり、学校の畑を耕していると次々に軽石が見つかったりすることから設定した。低学年や高学年男子を中心に、学校の周りから、次々と軽石を探してきた。これは、6年生の理科の学習や防災教育・故郷を知る学習へつなげることも意識したミッションであった。軽い軽石は隙間も多いはずということで、軽石を水槽に入れ泡の出続ける時間を計る等の活動も行った。

秋になり、見本林にドングリが落ち始めると「ドングリトトロ」作りがミッションとなった。修正液と黒ペンでドングリに顔を描き、廊下に飾った。これは、生活科の季節を生かした遊びとのつながりをねらったり、見本林の木への意識を高めさせよ

ドングリトトロ つくって写真とって



うと取り組んだ。秋の見本林を生かした活動は、生活科や理科の学習へとつながることができた。

2-3 「見触笑でGO！」からのひろがり

(1) 学習への広がり



生活科の学習と「見触笑でGO！」と関連付けた活動を展開した。「夏ともだちになろう」という単元では見本林で生き物探しのビンゴゲームをおこなった。昆虫や花のビンゴカードを作り、いろいろな生き物をさがし、日頃から見本林の中で活動している経験を生かすことができた。もちろんビンゴポイントも発行した。

「あきともだちになろう」では、造園業の方に来校いただき、「自分のお気に入りの木」を探す活動をおこなった。木の名前や特徴等今まで意識しなかったことに気付きながら、身近な自然に対する興味を高めることができた。子どもの感想からは、それまで「マツ」としか意識していなかった木が「ゴヨウマツ」「クロマツ」「アカエゾマツ」「トドマツ」のようにいろいろな種類があり、枝の向きや葉の数に違いがあることに気付いたことがわかった。また、経験的に「この場所はいい匂いがする」ととらえていたが、そこに生えている「桂の木」の匂いだということがわかるなど、自然に対する意識の深まりが感じられた。最後に、自分のお気に入りの木を決めて、まとめのカードを作った。

理科の学習でも4年生「秋の生き物」の学習で造園業の方を講師に「不思議図鑑」をまとめた。身の回りの木に興味をもつと同時に、専門家に話を聞くという学び方を体験することができた。



(2) 生活への広がり

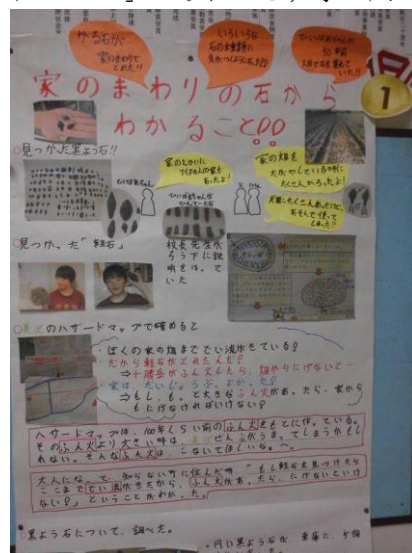


活動が軌道に乗り始めた頃から、「家でも写真を撮りたい」とこの子どもの希望が寄せられた。カメラを自宅に持ち帰らせると、ハヤブサが鳩を食べている写真、家のフォークリフトに作られたセキレイの巣と卵等の写真を撮ってきた。それらのすごさは他の子どもにも伝わり、興味・関心の共有や、新たな生き物をさがすきっかけとすることができた。

夏休みの自由研究にも「見触笑でGO！」の取組から、家の周りの石に興味をもち、軽石だけでなく黒曜石の破片等を拾い調べた子や、家のセキレイの卵を継続観察した子もいた。

軽石からは、その場所が十勝岳噴火による泥流の被害を受けるということ、黒曜石の破片からはその場所がかつて、アイヌの人々が生活していたのではないかとということ、旭川市科学館の方に教えてもらうことができた。黒曜石の存在は、これまでの美沢の歴史認識が変わる可能性も秘めており、広がりの可能性が高い。また、軽石の存在が泥流被害を受ける場所を表すことを知り、防災教育へも役立てることができた。

本年度から、ジオパークの取組の一環として「十勝岳自由研究コンクール」がおこなわれた。それらの研究もそこに参加し、様々な賞をもらうことができ、子どもの自信につながった。



2-4 「見触笑でGO！」の今後



冬になり、バードテーブルを設置した。アカゲラやヒヨドリ・ゴジュウカラがえさをついばむ姿が見られた。これまでの自然の中に入っていくという取組から、働きかける取組へとちょっと視点を変えている。また、雪が解けると低学年は「自分のお気に入りの木」に看板をつける予定である。これも、働きかける取組の一つと言える。

本校では、次年度の研修で課題作りの場面を取り上げる。理科や生活科の学習では、これまでの蓄積を生かすことができることを期待している。また、本校は「理科の授業改善」として、北海道教育大学旭川校と連携した取組を実施している。これまでの取組で旭川市科学館ともつながることができた。

次年度は、新学習指導要領に対応した各教科の教育課程作成の年となる。地域や校地内の環境を生かした活動を教育課程に位置付けたり、それらを支える日常的な自然とのふれあいを充実したりということが今後も大切である。



3 まとめ

興味・関心の高まりをねらった活動のため、単純な点数化や比較は難しい。しかし、子どもの意識は確かに変わってきた。

自然を見る目が深まった。特に細かく見るようになったと感じる。例えば、鳥を見る時の「カラス」「スズメ」「トリ」という以前の子どもの視点が、「ハシブトガラス」「アカゲラ」「セキレイ（子どもによってはセグロセキレイとキセキレイを区別する）」等のように細分化される。同じように春も夏も「セミ」だったものが、「エゾハルゼミ」や「エゾゼミ」と変化した。

身の周りの自然に興味をもった。子どもにより興味の対象は多様であるが、拾い、集め、撮って、採って、取っている。男子が軽石に興味をもち、校舎周りの砂利のところに大量に軽石を集めていた。女子は花の写真をたくさん撮ってきた。トウキビの雄花、雪の上の動物の足跡、夏のグラウンドに現れたウサギの写真もあった。

教科の学習との連携の充実が今後の課題である。来年度、本校の研修は、課題設定のあり方を予定している。理科や生活科の学習において、本年度の取り組みを生かした課題設定ができれば、日常生活から学習へのつながりがスムーズとなる。その研修や実践を通し、「見触笑でGO！」の取り組みをしっかりと教育課程と関連付けていきたい。

この、取組を今後の教育活動につなげ、理科や生活科等の学習を充実させるだけでなく、身の回りの自然に目を向ける子ども、この美沢で育ったことに誇りをもてる子どもを育てていきたい。

謝 辞

今回の実践にあたり、公益財団法人中谷医工計測技術振興財団様からは助成等をいただき、心から感謝申し上げます。いただいた助成金でデジタルカメラをはじめとする機材を買いそろえさせていただき、子どもたちひとりひとりがデジカメをもって自然の中に飛び込める活動体制を作ることができました。校地内の学習環境も整備できた。これからも身の回りの自然に興味をもつ子どもの育成をすすめていきたい。